

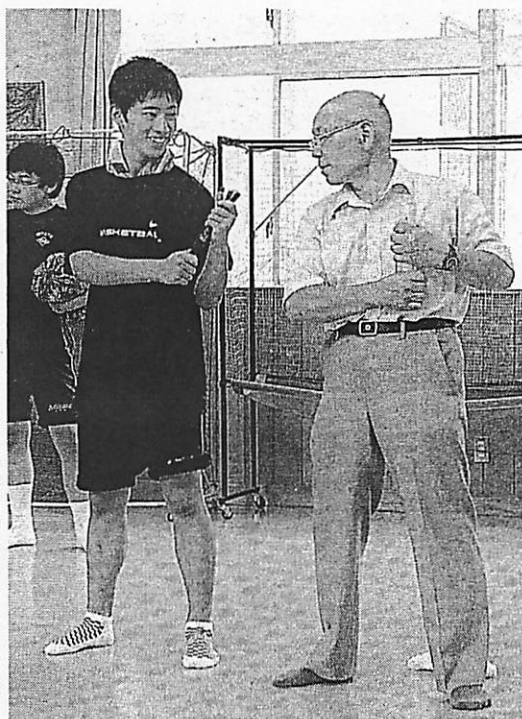
御館中学校みたて (郡山市)

カン、カンという拍子木の音とともに、歌舞伎特有の言い回しが校内に響く。生徒たちが練習しているのは、郡山市中田町柳橋地区に江戸時代から続く農民歌舞伎「柳橋歌舞伎」。今月19日の本番に向け、「もっと抑揚をつけて」「ゆっくりと力強く」と細か



い指導が出て、練習にも熱が入る。上演予定の演目「義経千本桜」で、義経を演じる3年の相良啓介君(15)は「伝統文化を受け継ぐ貴重な経験をしている。練習は立ちっぱなしでつらいけれど、先輩たちの方がうまかったと言われたくないので、負けないように

柳橋歌舞伎で表現力磨く



宗像さん(右)の指導を受け「義経千本桜」の一幕を練習する生徒(郡山市立御館中学校で)

成功させたい」と力を込めた。柳橋歌舞伎は、明治時代以降、後継者不足などから幾度となく中断を余儀なくされたが、1980年に保存会が結成されて以降は毎年上演され、83年には市重要無形文化財に指定された。

同校は、この歌舞伎を2002年に「総合的な学習の時間」に取り入れ、05年からは

全校生徒で取り組み始めた。保存会のメンバーの指導を受けながら、毎年9月に開催される定期公演に出演。10月の文化祭でも披露し、地元のお年寄りらが見るのを楽しみにしているという。

年間の学習時間は40時間で、「役者・裏方」「舞台・効果」「化粧」「解説・記録」「音楽・伴奏」の5グループに分かれて、

5月からほぼ週1回2時間練習する。指導する保存会の宗像大吉さん(63)は「子どもたちが地域の伝統芸能に興味を持って育ち、地元に残って受け継いでくれたら。頑張っている姿に私たちも励まされているんです」と語る。

歌舞伎の学習は、文化を伝承するだけではない。半沢一寛教頭は「自信を持って自分の考えを伝える力を伸ばす意味もあるのです」と胸を張る。他学年の生徒や地元の人たちなど多くの人と接することで、コミュニケーションや発表、表現能力がつくという。

今回、弁慶を演じる3年の三瓶裕太君(14)は「人前での発表は苦手だったけれど、舞台に立つようになってからは、授業中に積極的に手を挙げて発言できるようになり、自分に自信がついた」と話しており、生徒の積極性を促すことにもなっているようだ。

(矢吹美貴)